

十文字学園女子大学人間生活学部

児童幼児教育学科

准教授 長田 瑞恵

研究報告書 「幼児における自称詞の使用」

長田 瑞恵
(十文字学園女子大学)

本研究の目的

自分の呼称(以後「自称詞」と呼ぶ)は自我の発達を表すものの一つと考えられる(西川, 2003). 子どもたちは2歳過ぎから主に自分の愛称(三人称)を名乗って他者との区別を明確にし, 3歳頃から三人称で呼ぶのをやめ, 一人称代名詞を用いるようになる. このように, 自称詞は他者との区別において自我と関連して獲得されはじめると考えられる(西川, 2003). したがって, 自称詞の獲得には自分とは異なるものとしての他者の視点の獲得が関連していると考えられる.

そこで, 本研究の第一の目的として, 自称詞の使用と他者視点の獲得との関連を検討する. 一人称代名詞の使用は, 他者から物理的に何が見えるかの理解(物理的他者視点)との関連よりも, 誤信念の理解などのような心理的他者視点との関連の方が強いことが予想される.

また, 欲求, 感情, 思考などを表す心的用語を用いて, 自分自身だけでなく, 他者についても言及できるようになるためには, 自己と他者の区別が付き, 他者とは異なるものとしての自我の発達が必要であると考えられる. このように, 自称詞の使用においても, 心的用語の使用においても, ともに自我の発達に関連していると予想されるため, 自称詞使用と心的用語使用とは同時期に発達が進むと考えられる.

そこで, 本研究の第二の目的として, 自称詞の使用と心的用語の使用との関連を検討する.

方法

***研究協力者** 埼玉県・東京都の私立保育園の3歳児クラス33名(平均年齢4歳1ヶ月, 男児22名・女児11名), 4歳児クラス33名(平均年齢5歳0ヶ月, 男児11名・女児22名), 5歳児クラス33名(平均年齢6歳1ヶ月, 男児18名・女児15名)であった.

***材料と手続き**

1. 物理的視点課題2種(12点満点)

①かくれんぼ課題 かくれんぼの設定のもとにアンパンマン・バイキンマンの人形と四角柱を配置した紙を提示し, 鬼のバイキンマンに見つからないように, アンパンマンを隠すように被験者に依頼した. 鬼が被験者の向かい, 向かって右, 向かって左の3場面について質問. 場面の順序はカウンターバランスをとった.

②人形課題 方眼紙上に3体配置した人形の見え方を4枚の選択肢の写真の中から選択してもらった. 3パターンの配置のそれぞれについて, 被験者自身, 被験者の反対側の他者,

被験者の右側にいる他者からの見え方を選択してもらった。質問する見え方の順序はカウンターバランスをとった。

2. 心理的視点課題 4 種 (16 点満点)

①自己信念変化課題 2 種

a. 「ハサミ課題 (内容変化)」 クレヨンの箱をあけると中にハサミが入っているのを提示し、箱をあける前に被験者自身が中に何が入っているかと思っていたかを質問した。

b. 「アイスクリーム課題 (位置変化)」 おもちゃの冷蔵庫ではなく机にアイスクリームが入っているのを提示し、初めてこれを見た時に被験者自身がどちらにアイスクリームが入っているかと思っていたかを質問した。

②他者信念変化課題 2 種

a. 「パトカー課題 (内容変化)」 箱にパトカーを入れて出て行ったクマが不在の間に、ウサギがパトカーをバスに置き換える場面を提示し、戻ってきたクマが中に何が入っているかと思うかを質問した。

b. 「クレヨン課題 (位置変化)」 クレヨンを丸い箱に入れて出て行ったウサギが不在の間に、クマがクレヨンを四角い箱に入れ替えるのを提示し、戻ってきたウサギがどこを探すかを質問した。

視点課題の順番はカウンターバランスをとった。

3. 自己属性課題 ラポール形成後、自分自身について人物像を語ってもらった。「○○ちゃん (被験者) はどんな子かな?」「○○ちゃんは自分のどんなところが好き?」「○○ちゃんの自分のいいところはどこかな?」適宜、「他には?」「どうして?」などと回答を促した。協力者と調査者の会話は録音し、逐語的に文字化して分析に使用した。

4. 他者属性課題 保育園で一番仲の良い友達の名前を尋ねた後、その友達の人物像を語ってもらった。「▲▲ちゃん (友達) はどんな子かな?」「○○ちゃんは▲▲ちゃんのどんなところが好き?」「▲▲ちゃんのいいところはどこかな?」適宜、「他には?」「どうして?」などと回答を促した。協力者と調査者の会話は録音し、逐語的に文字化して分析に使用した。

5. 保護者への質問紙 対象児が家族や友達・担任保育士に対して、自分のことをどう呼んでいるのかを自由記述してもらった。担任保育士を通じて配布回収した。回収率は 88.8%であった。

結 果

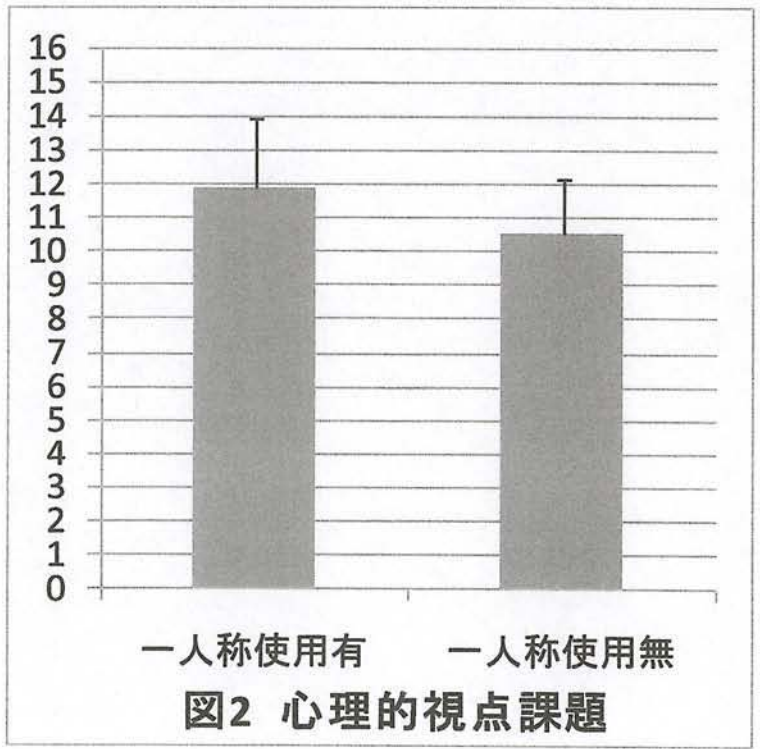
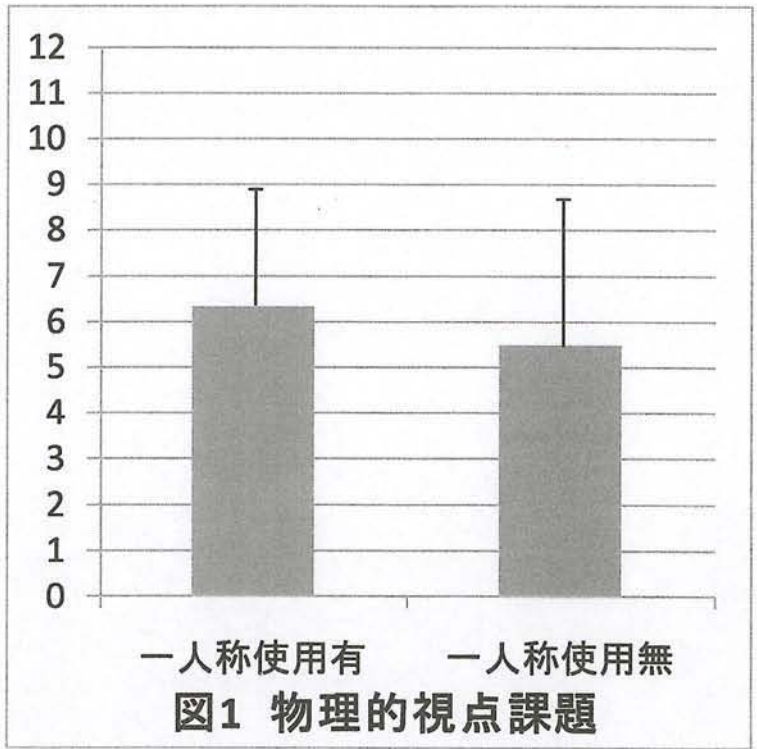
1. 一人称代名詞使用と自称詞使い分けとの関連

保護者への質問紙が回収できた 88 名を分析対象とした。保護者への質問紙の回答に基づき、様々な相手との相互作用場面で 1 回でも一人称代名詞を使用することがある子どもを「一人称使用有」、1 回も一人称代名詞を使用することがない子どもを「一人称使用無」と分類した。また、相手や場面に応じて自称詞を変えるとされた子どもを「使い分け有」、相

手や場面にかかわらず同じ自称詞を使用する子どもを「使い分け無」と分類した。被験者の人数について、学年(3)×一人称使用(2:有・無), 学年(3)×使い分け(2:有・無)の χ^2 検定を行った結果, いずれも人数の偏りは有意ではなかった。そこで, 一人称使用(2)×使い分け(2)の χ^2 検定を行った結果, 人数の偏りは有意であり($\chi^2(1)=43.13, p<.01$), 残差分析の結果, 一人称使用有では使い分け有(N=42)が期待値よりも有意に多く, 使い分け無(N=2)が期待値よりも有意に少なかった。一方, 一人称使用無では使い分け有(N=12)が期待値よりも有意に少なく, 使い分け無(N=32)が期待値よりも有意に多かった。以上の結果から, 自称詞として一人称代名詞を使用する子どもは, そうでない子どもよりも, 相互作用の相手や場面に応じて自称詞を使い分けることが多いことが示された。

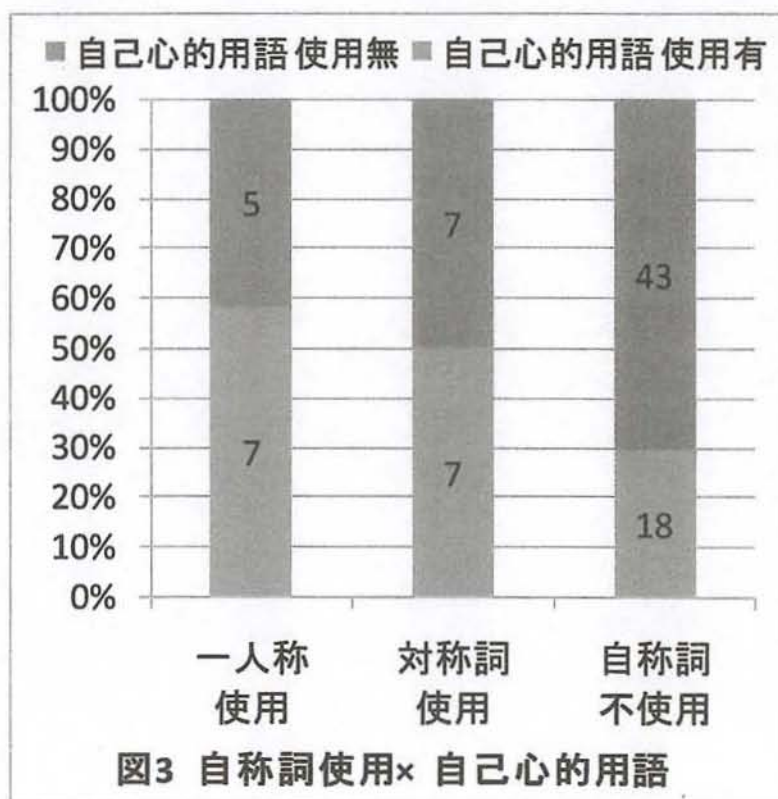
2. 使い分け有児における一人称代名詞使用と他者視点取得との関連

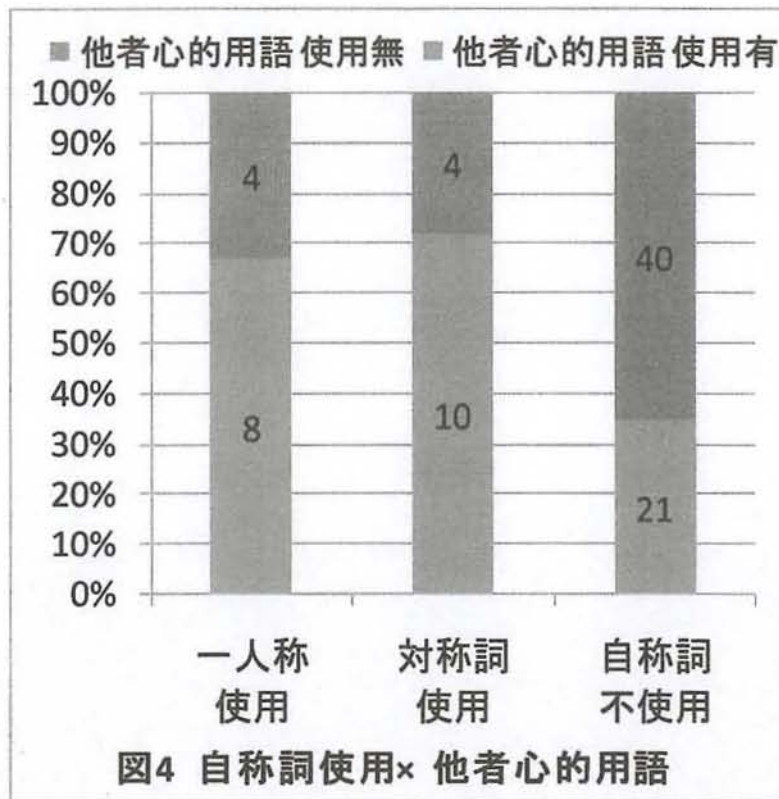
結果 1.から, 相手に応じた自称詞の使い分けと一人称代名詞使用とが関連することが示された。しかし, 一人称代名詞を使用する子どもでは相手や場面に応じた使い分けをしない子どもは非常に少なかったため, 使い分けをする子どものみを分析対象とし, 一人称代名詞を使用するか否かによって他者視点取得課題の成績を比較した。物理的視点得点と心理的視点得点のそれぞれを従属変数として, 一人称使用有無を独立変数としたt検定を行ったところ, 物理的視点得点(図1)では群間の差は有意ではなかった($t(51)=0.97, n.s.$)が, 心理的視点得点(図2)では群間の差は有意であり($t(51)=2.03, p<.05$), 一人称使用有が一人称使用無より得点が高かった。以上の結果より, 相手や場面に応じて自称詞を使い分ける子どもにおいては, 一人称代名詞を使用する子どもの方が, 心理的視点取得が進んでいることが示された。



3. 自称詞使用と心的用語使用

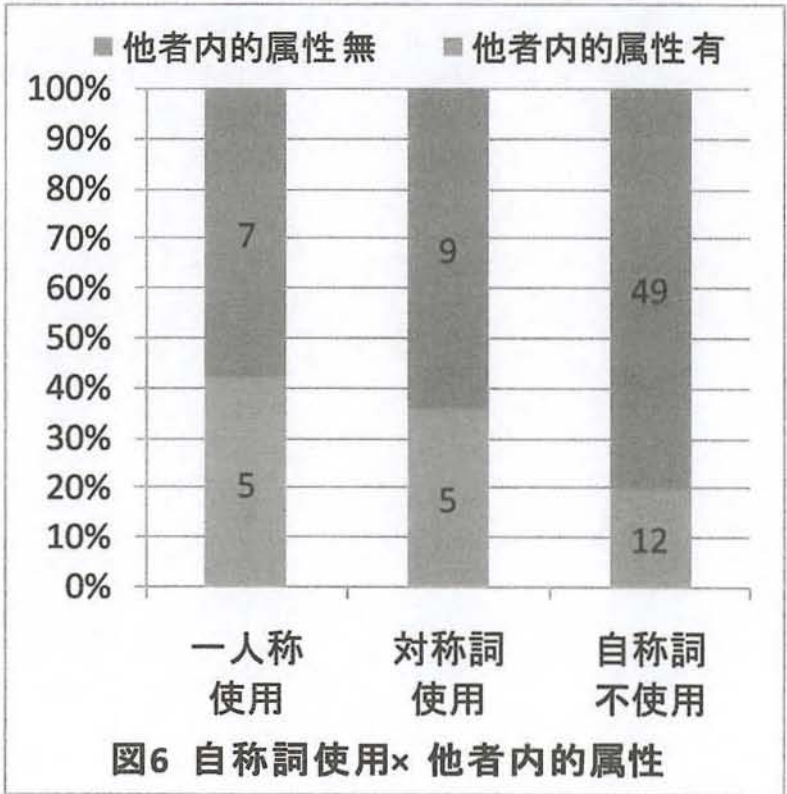
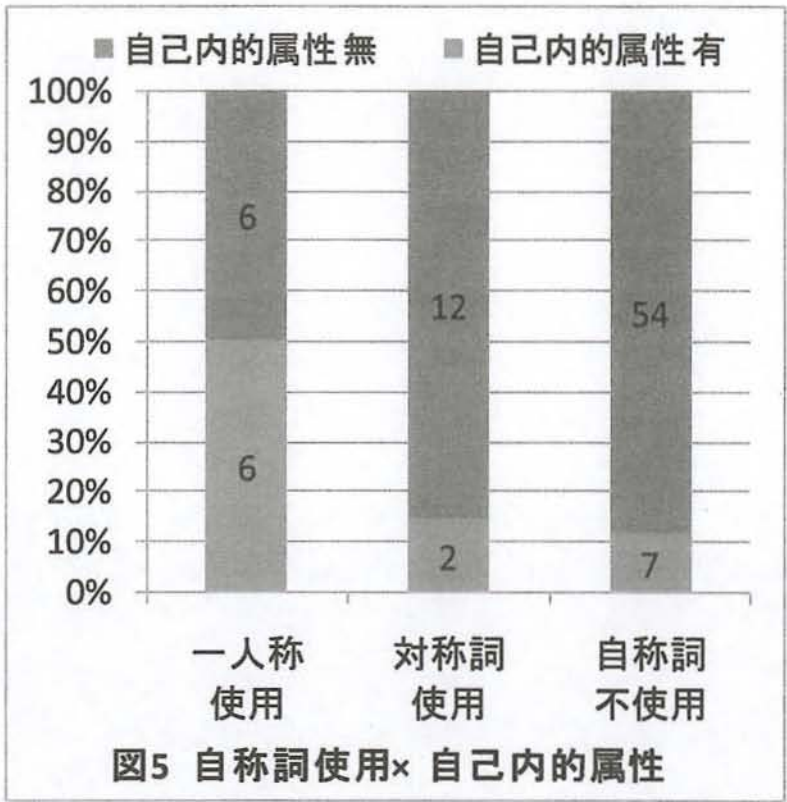
2つの人物記述課題において1回でも一人称代名詞を使用した子どもを「一人称使用」、対称詞のみを使用した子どもを「対称詞使用」、自称詞を全く使用しなかった子どもを「自称詞不使用」と分類した。また、各課題の中で心的用語を使用したか否かで、自己心的用語有・無、他者心的用語有・無に被験者を分類した。予備分析の結果、自称詞使用、自己心的用語有無、他者心的用語有無のいずれも学年による人数の偏りは示されなかった。自称詞使用と心的用語使用に違いがあるか否かを検討するために、自称詞使用(3)×自己心的用語有無(2)、自称詞使用(3)×他者心的用語有無(2)の χ^2 検定を行った。その結果、自己心的用語有無では人数の偏りが有意傾向であり($\chi^2(2)=4.83, p<.10$: 図3)、残差分析の結果、自称詞不使用では、自己心的用語有が期待値より有意に少なく、自己心的用語無が期待値より有意に多い傾向があった。さらに、他者心的用語有無について人数の偏りが有意であった($\chi^2(2)=8.98, p<.01$: 図4)。残差分析の結果、自称詞不使用では他者心的用語有が期待値より有意に少なく他者心的用語無が有意に多い一方で、対称詞使用では他者心的用語有が期待値より有意に多く他者心的用語無が有意に少なかった。





4. 自称詞使用と記述された人物の内的心的属性

2つの人物記述課題において内的心的属性に言及したか否かで自己内的属性有・無，他者内的属性有・無に被験者を分類した．予備分析の結果，自己内的属性有無，他者内的属性有無のいずれも学年による人数の偏りは示されなかった．自称詞使用と人物の内的心的属性の記述が関連するか検討するために，自称詞使用(3)×自己内的属性有無(2)，自称詞使用(3)×他者内的属性有無(2)の χ^2 検定を行った．その結果，自己内的属性有無($\chi^2(2)=10.53$, $p<.01$ ：図5)について人数の偏りが有意であった．残差分析の結果，自称詞不使用では内的属性有が期待値より有意に少なく内的属性無が有意に多い一方で，一人称使用では，内的属性有が期待値より有意に多く内的属性無が有意に少なかった．他者内的属性有無については人数の偏りは有意ではなかった($\chi^2(2)=3.52$, n.s.：図6)．



考 察

結果 1 より、一人称代名詞の使用と自称詞の使い分けとが関連することから、両者は、他者との関係性の中で自分の立場を調整しながら表明する能力の発達と関連していることが示唆された。対話の場における話し手と相手の具体的な役割を明示し確認するという自称詞の機能（鈴木，1973）の発達を表していると言えよう。

さらに、結果 2 より、自称詞の獲得は、他者から物理的に何が見えるかの理解（物理的他者視点）との関連よりも、誤信念の理解などのような心理的他者視点との関連の方が強いことが示された。この結果は、自称詞の獲得には自分とは異なるものとしての他者の視点の獲得が関連していることを示唆していると考ええる。

結果 3 より、自称詞を使用しない子どもでは心的用語の使用が少なかったことから、自称詞使用と心的用語使用とは関連することが示された。この結果は、自称詞と心的用語を使用する能力とが共に、他者との区別において発達する自我との発達と関連することを示唆していると考ええる。

一方、結果 4 より、自称詞の使用は自分自身の内的心的属性を語る能力とも関連することが示されたが、他者の内的心的属性を語る能力とは関連が示されなかった。この点については、被験者数を増やす、課題内容を改良するなどして、さらに詳しく検討を行う必要があると考ええる。

引用文献

西川由紀子.(2003) 子どもの自称詞の使い分け：「オレ」という自称詞に着目して。発達心理学研究, 14 (1), 25-38.

鈴木孝夫.(1973) ことばと文化。東京：岩波書店。

謝辞

研究にご協力頂きました保育園の園児の皆様，保護者の皆様，教職員の皆様に心よりお礼申し上げます。

付記

本研究の実施にあたって、平成 21 年度科学研究費（若手研究(B) 課題番号 21730597）の助成を受けた。